

## 40年にわたる心臓血管病予防プログラムの地域介入に効果あり

総合的な心臓血管リスク減少プログラムは、とくに地方の低所得地域においては10年以上実施されている例がほとんどなく、罹患率や死亡率の改善効果についてはわかっていない。本研究では、過疎の低所得地域において、心臓血管病予防プログラムの継続的介入による40年間の観察研究を実施し、その効果について検討した。

1970年、米国メイン州フランクリン郡の住民22,444例が対象となった。心臓血管病予防プログラムの効果を、メイン州の他の郡のデータと比較した。プログラムは高血圧、コレステロール、喫煙、食事や運動をターゲットとしたもので、自治体や病院、医師により実行された。主要評価項目は高血圧や高脂血症の発見、治療および管理状況、禁煙率、入院率（所得中央値補正後）、死亡率（所得および年齢補正後）とした。その結果、心臓血管病リスク因子をターゲットとしたプログラムの導入により、40年間で健康指標に改善がみられた。高血圧のコントロールがされていた人は1975年から1978年の間に18.3%から43.0%と24.7%増加し、コレステロール値の上昇がコントロールされていた人は1986年から2010年の間に0.4%から28.5%と28.5%増加した。禁煙率は48.5%から69.5%に上昇し（1996年～2000年）、州平均（58%から61%に上昇）よりも有意な改善がみられた。なお、2000年以降は、メイン州全体の禁煙率が上昇し、両者間の差はなくなった。フランクリン郡の入院件数は、1994年から2006年において期待値よりも少なかった（退院の観察値－期待値[O-E]：-17件/1,000人、 $p<0.001$ ）。補正後死亡率は、メイン州で唯一、フランクリン郡が一貫して予測値よりも少なかった（1970～1989年の死亡の観察値－期待値[O-E]：-60.4件/100,000人、 $p<0.001$ 、1990～2010年の同値：-41.6件/100,000人、 $p=0.005$ ）。

したがって、心臓血管病リスクおよび生活習慣の改善を目的としたプログラムの40年間にわたる継続的な介入により、介入しなかった地域と比べ、入院率や死亡率が低下したことが示された。このプログラムの効果が、他の地域とくに過疎の地方で、また世界的にも普遍的に認められるかについてはさらなる検討を要する。

出典：Journal of the American Medical Association. 2015; 313(2): 147-155